

青年期における TP-SOC のサブタイプの探求 —人生の意味, 自尊感情, 精神的健康度, 遅刻・欠席に着目して—

Exploring TP-SOC subtypes in adolescents: with a focus on life meaning, self-esteem, mental health and tardiness/absenteeism.

今井田 貴裕¹ IMAIDA Takahiro ・ 磯和 壮太郎 ISOWA Soutarou

(¹ 人間環境大学心理学部専任講師)

Keyword: adolescents, Time Perspective-Sense Of Coherence, Subtype,

問題

大学生の遅刻や欠席は、授業の単位取得に否定的な影響を及ぼす。これまでに、遅刻や欠席の多い学生はそうでない学生に比べて、成績の指標である Grade Point Average (GPA) が低下する傾向にあること¹⁾などが報告されている。そのため、遅刻や欠席が休退学のセンサーとなりうると考えられる。

近年では、遅刻や欠席の多い学生に関する生活上の特徴も見出されつつある。例えば、サークル活動や大学生生活が充実していないこと²⁾や人間関係のネットワークを形成するスキルが乏しいこと³⁾、居眠りが多いこと⁴⁾などが報告されている。したがって、遅刻や欠席の多い学生は、大学に対する修学意欲の低下に伴って、健康度も低下していると考えられる。そこで、本研究では、遅刻や欠席の多い学生の健康の指標⁵⁾である首尾一貫感覚 (Sense of Coherence: SOC) に着目した。

SOCはストレス対処力と目されており、これまで様々な領域で検討されてきた^{6) 7)}。Antonovsky⁵⁾によれば、SOCはストレッサーに対する把握可能感や処理可能感、ストレッサーに対する対処への有意味感の3下位概念で構成される。この把握可能感・処理可能感・有意味感の異なる8つのサブタイプが仮定されており、それぞれに異なるストレス対処行動 (Table 1) が仮定されている⁸⁾。例えば、有意味感の高い特徴を有するタイプBやC, Dはストレッサーを把握または処理できていないと感じていたとしても、ストレッサーの対処に意味を見出していることから、把握可能感や処理可能感も高くなると考えられている。その一方で、有意味感の低いタイプEやF, G, Hは、ストレッサーを把握または処理できていたとしても、ストレッサーの対処に意味を見いだせないため、把握可能感や処理可能感も低くなると考えられている。しかし、こうしたAntonovsky⁸⁾のSOCのサブタイプは実証的にほとんど確認されてこなかった。

Table 1
Antonovsky の仮定したSOCの8タイプ

タイプ	把握可能感	処理可能感	有意味感	特徴
A	高	高	高	SOCが安定しており、世界を首尾一貫したものとみなしている。
B	低	高	高	混沌として予測不可能だと思ふ世界において、うまくストレスを処理できると考えることは困難である。そのため、ほとんど存在しない。
C	高	低	高	直面する問題を理解しているが、その対処には不安を抱えている。しかし、ストレス対処に対する動機づけがあるため、処理可能感も高くなっていく。
D	低	低	高	予測不能だと思ふ世界の中で、ストレス対処に成功する確信はないが、ストレス対処への動機づけがある。把握可能感や処理可能感も高くなっていく。
E	高	高	低	直面する問題を理解しており、ストレス対処もできると考えているが、問題に関心がない。まもなく、把握可能感や処理可能感も下がっていく。
F	高	低	低	直面する問題に関心がなくストレス対処に対する動機づけもない。世界はまもなく把握不可能なものとなるため、把握可能感も下がっていく。
G	低	高	低	混沌として予測不可能だと思ふ世界でうまくストレスを処理できる考えることは困難である。そのため、ほとんど存在しない。
H	低	低	低	SOCが安定し、世界が矛盾に満ちたものとみなしている。

注) Anotonovksy (1987) の規定する8タイプの説明を著者らが要約し、便宜的にタイプ名をA～Hと名付けた

こうしたストレス対処力であるSOCのサブタイプの知見の少なさを踏まえ、著者ら⁹⁾は、SOC-13を用いてSOCのサブタイプの抽出を試みた。しかし、Antonovsky⁸⁾により仮定されたサブタイプは全て抽出されなかった。この原因として、Sense of Coherence 29 (SOC-29) やSense of Coherence 13 (SOC-13) は因子的妥当性の問題や¹⁰⁾、3下位概念の内的整合性の低さ¹¹⁾といった欠点を抱えた尺度であることが原因と考えられる。そのため、SOCの測度自体の改善が必要と考えられる。

こうしたSOC-29やSOC-13の欠点を踏まえ、著者ら¹²⁾はTime Perspective-Sense of Coherence 9 (TP-SOC 9)を開発した。TP-SOC 9は、Togari et al.¹³⁾のUniversity of Tokyo Health Sociology version of the Sense of Coherence 3 (SOC 3 - UTHS)に時間的概念を追加することによりAntonovsky⁵⁾のSOCの構成概念に近づけることを試みた尺度である。具体的には、SOC 3 - UTHS¹³⁾では把握可能感・処理可能感・有意味感の3下位概念を3項目のリッカート法で捉えるが、TP-SOC 9¹²⁾はSOC 3 - UTHSの3項目に、過去・現在・未来について問うファセットを追加することにより9項目に拡張したのである。なお、今井田・磯和¹²⁾はTP-SOC 9の検討をストレスフルな学校教員を対象に行っており、探索的因子分析により把握可能感・処理可能感・有意味感の3因子に分類されることと、信頼性分析により内的整合性も高いこと ($\alpha = .88 \sim .90$) が確認されている¹²⁾。そのため、上述したAntonovsky⁸⁾によるSOCのサブタイプを抽出するには、SOC-29やSOC-13よりも、3因子を区別することが可能なTP-SOC 9の方が適していると考えられる。そこで、本研究の第一の目的を、TP-SOC 9を用いてAntonovsky⁸⁾の仮定したストレス対処力のサブタイプを抽出することとした。

ところで、SOCが健康の指標であることは数多の先行研究^{14) 15)}から明白である。そのため、強いSOCを有する人々の人生の意味を肯定的に捉えており¹⁶⁾、自尊感情も強く¹⁷⁾、精神的健康度も良好¹⁸⁾であろう。また、強いSOCを有する人々は上述した特徴に加えて遅刻や欠席も少ないと考えられる。そこで、本研究では、TP-SOCのサブタイプ毎に健康

に関する指標の検討を行うことを第二の目的とした。

方法

調査協力者

平均年齢 19.30 歳 ($SD = 0.95$) の一般大学生 267 名 (男性 162 名, 女性 105 名) の協力を得た。磯和・今井田¹⁹⁾ とデータの重複がある。

質問票

TP-SOC を, TP-SOC 9¹²⁾ で得た。同尺度は, 過去・現在・未来の把握可能感 (項目例, これまでの私は, 日常生じる困難や問題を理解できたり予測したりできた) と処理可能感 (項目例, 現在の私は, 日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う), 有意味感 (項目例, これからの私は, 人生で生じる困難や問題のいくつかは, 向き合い, 取り組む価値があると思えると思う) をそれぞれ 3 項目で問う。回答方法は, 5 件法 (「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」) で回答を求めた。同尺度は高得点になるほどストレス対処力が強いことを示す。本研究では尺度得点と下位尺度得点をそれぞれ分析に用いた。

人生の意味を人生の意味三次元尺度²⁰⁾ の日本語版²¹⁾ で得た。同尺度は, 意義 (項目例, 私の人生は価値あるものである) を 3 項目, 目的 (項目例, 私は自分の人生において, 1 つ以上の大きな目的を追求している) を 4 項目, 一貫性 (項目例, 私の人生で起こるほとんどのことは, 理にかなっている) を 4 項目で問う。回答方法は, 7 件法 (「1. まったくあてはまらない」～「7. 非常によくあてはまる」) で回答を求めた。同尺度は, 高得点になるほど人生の意味について強く考えていることを示す。同尺度は, 因子構造について十分な知見が報告されていない²²⁾ ため, 本研究では尺度得点のみを分析に用いた。

自尊感情を, Rosenberg 自尊感情尺度²³⁾ の日本語版²⁴⁾ で得た。福留・森永²⁵⁾ に倣い, 肯定的な項目群 (項目例, 私は自分に満足している。) で構成される肯定的自尊感情 (Positive Self-Esteem : PSE) と, 否定的な項目群 (項目例, 私は自分がだめな人間だと思う。) で構成される否定的自尊感情 (Negative Self-Esteem : NSE) をそれぞれ 5 項目で回答を求めた。回答方法は, 中立の回答の重要性を考慮して今井田・磯和⁹⁾ の 5 件法 (「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」) を用いた。同尺度は, 高得点になるほど肯定的自尊感情または否定的自尊感情を強いことを示す。従来では否定的自尊感情を逆転項目として用いて 10 項目での合計得点を算出するが, 近年では否定的な自尊感情が低く評定することが必ずしも肯定的な自尊感情を有することではないことが指摘されている²⁶⁾。そのため, 本研究では下位尺度得点のみを分析に用いた。

精神的不健康度を, K 10²⁷⁾ の日本語版²⁸⁾ で得た。同尺度は, 10 項目 (項目例, 理由もなく疲れ切ったように感じましたか?) で問う。回答方法は 4 件法 (「0. 全くない」～「4.

いつも)」で回答を求める。高得点になるほど精神的に不健康であることを示す。本研究では尺度得点を分析に用いた。

さらに、大学生の遅刻数と欠席数を試行的に各1項目で質問した。前者については「あなたは咎められない授業であれば、遅刻をしますか?」といった項目内容であり回答方法は7件法(「1. 全く遅刻しない」～「7. 遅刻をすることが多い」)であった。後者については「あなたは毎期、一つの授業につきどれくらい欠席しますか?」といった項目内容であり回答方法は6件法(「0回」～「5回」)であった。いずれも高得点になるほど遅刻や欠席が多いことを示す。それぞれの得点を分析に用いた。

倫理的配慮

本研究は以下の倫理的配慮を順守してWeb上の質問票を用いて実施された。同意書には、1) データは統計的に処理され、研究目的で利用されるため、個人情報を守秘されること、2) 回答の拒否が自由であること、3) 心身の調子が悪い場合には回答を控えてもらうこと、4) 気分が悪くなった際は中止しても構わないことを明記し、口頭でも説明しWeb上で同意を得た。さらに、回答者同士の席を離し、隣席から回答画面をのぞき込まれることを防止した。なお、実際に気分が悪くなって中止した者はいなかった。

結果

各尺度の基礎統計量と信頼性係数、各尺度間の相関係数

まず、各尺度の基礎統計量および信頼性係数を算出した。精神的健康度および欠席数は左寄りの結果を示し、遅刻数は床効果を示した。また、各尺度の内的整合性については、十分な信頼係数($\alpha s = .83 \sim .94$)が示された。

次に、各尺度間で相関分析を実施した。まず下位概念間で検討した結果、TP-SOCでは正の相関($r_s = .48 \sim .53, p < .01$)が、自尊感情では負の相関($r_s = .66, p < .01$)がそれぞれ確認された。また遅刻数と欠席数に正の相関($r = .30, p < .01$)が確認された。

他方、人生の意味は、TP-SOC($r_s = .40 \sim .51, p < .01$)やPSE($r = .68, p < .01$)と正の相関を、NSE($r = -.50, p < .01$)や精神的な健康度($r = -.32, p < .01$)と負の相関を、遅刻数($r = -.06, n.s.$)や欠席数($r = -.04, n.s.$)と無相関を示した。自尊感情におけるPSEはTP-SOC($r_s = .43 \sim .56, p < .01$)と正の相関を、精神的な健康度($r_s = -.43, p < .01$)と負の相関を、遅刻数($r = -.06, n.s.$)や欠席数($r = .01, n.s.$)と無相関を示した。NSEは、TP-SOC($r_s = -.21 \sim -.33, p < .01$)と負の相関を、精神的な健康度($r = .53, p < .01$)と正の相関を、遅刻数($r = .06, n.s.$)や欠席数($r = -.03, n.s.$)と無相関を示した。精神的な健康度は、把握可能感($r = -.01, n.s.$)を除くTP-SOC($r = -.15, p < .05$)や処理可能感($r = -.15, p < .01$)、有意味($r = -.20, p < .01$)と下位尺度と負の相関を示した。遅刻数はTP-SOC($r_s = -.11 \sim -.19, p < .01$)と負の相関を、欠席数はTP-SOC($r_s = -.10 \sim .01, n.s.$)と無相関であった以上の結果をTable 2に示した。

Table 2
各尺度の基礎統計量と信頼性係数, 各尺度間の相関係数

変数名	M	SD	α	TP-SOC				人生の意味	自尊感情		精神的 不健康度	遅刻数	欠席数
				TP-SOC	把握可能感	処理可能感	有意味感		PSE	NSE			
TP-SOC	3.43	0.78	.92	—									
把握可能感	3.16	0.99	.94	.86 **	—								
処理可能感	3.39	0.94	.92	.87 **	.66 **	—							
有意味感	3.74	0.85	.89	.78 **	.48 **	.53 **	—						
人生の意味	4.10	1.34	.93	.51 **	.40 **	.44 **	.44 **	—					
自尊感情													
PSE	3.37	0.93	.85	.56 **	.43 **	.51 **	.47 **	.68 **	—				
NSE	2.87	0.97	.83	-.31 **	-.21 **	-.33 **	-.23 **	-.50 **	-.66 **	—			
精神的な健康度	1.03	0.98	.94	-.15 *	-.01	-.19 **	-.20 **	-.32 **	-.43 **	.53 **	—		
遅刻数	2.60	1.86	—	-.18 **	-.11 †	-.17 **	-.19 **	-.06	-.06	.06	.14 *	—	
欠席数	1.50	1.35	—	-.05	.01	-.04	-.10	-.04	.01	-.03	.12 *	.30 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注) 自尊感情のNSEは, 逆転処理せずに算出した

TP-SOCのサブタイプの抽出と各クラスターの心理的特徴

尺度間の比較を行うため, 全尺度の得点を標準得点に変換し, TP-SOC 9の下位尺度得点を投入したクラスター分析(ユークリッド距離・ward法)により, 調査協力者を9 Cluster(CL)に分類した。Figure 1には標準得点に換算した各CLの特徴を, Table 3には各CLの尺度毎の平均値をそれぞれ示した。CLを独立変数, 各尺度を従属変数とした多変量分散分析を行った。多変量検定(Pillai's Trace, Wilks's λ , Hotelling's Trace, Roy's Largest Root)は全て0.1%水準で有意であった。他方, 単変量検定の結果, CLの主効果は0.1%水準(把握可能感: $F(8, 258) = 131.31$, 処理可能感: $F(8, 258) = 132.45$, 有意味感: $F(8, 258) = 155.88$, 人生の意味: $F(8, 258) = 10.09$, PSE: $F(8, 258) = 12.64$, NSE: $F(8, 258) = 4.31$) または1%水準(精神的な健康度: $F(8, 258) = 2.74$), 5%水準(遅刻数: $F(8, 258) = 2.41$) で有意であった。欠席数 ($F(8, 258) = 1.08$) は有意でなかった。

Figure 1
各CLの標準得点

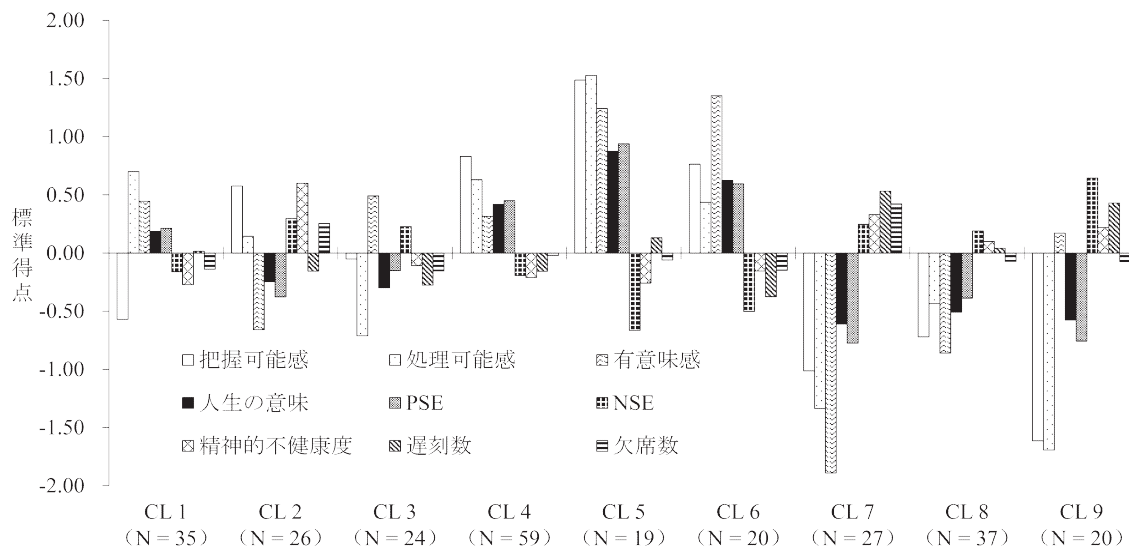


Table 3
各CLの平均値および多重比較の結果

	CL 1	CL 2	CL 3	CL 4	CL 5	CL 6	CL 7	CL 8	CL 9
所属人数 (N)	35	26	24	59	19	20	27	37	20
SOCタイプ	B	F	G		A	D	H	H	
把握可能感	2.60	3.73	3.11	3.98	4.63	3.92	2.16	2.45	1.57
処理可能感	4.05	3.53	2.72	3.98	4.82	3.80	2.14	2.98	1.80
有意味感	4.11	3.18	4.15	4.01	4.79	4.88	2.14	3.01	3.88
人生の意味	4.35	3.77	3.70	4.66	5.27	4.94	3.28	3.42	3.33
PSE	3.57	3.02	3.23	3.79	4.24	3.92	2.64	3.01	2.66
NSE	2.71	3.15	3.08	2.68	2.22	2.38	3.10	3.05	3.49
精神的不健康度	0.76	1.61	0.92	0.82	0.77	0.88	1.35	1.12	1.24
遅刻数	2.63	2.31	2.08	2.31	2.84	1.90	3.59	2.68	3.40
欠席数	1.31	1.85	1.29	1.47	1.42	1.30	2.07	1.41	1.40

注) 各値は標準得点に換算する前の値

Table 4
多重比較 (Tukey) の結果

把握可能感	CL 5 > CL 4 = CL 6 = CL 2 > CL 3 > CL 1 = CL 8, CL 8 = CL 7 > CL 9
処理可能感	CL 5 > CL 1 = CL 4 > CL 6 = CL 2 > CL 8 = CL 3 > CL 7 = CL 9
有意味感	CL 6 = CL 5 > CL 3 = CL 1 = CL 9 = CL 4 > CL 2 = CL 8 > CL 7
人生の意味	CL 5 = CL 6 = CL 4 > CL 8 = CL 9 = CL 7, CL 5 = CL 6 = CL 4 > CL 2 = CL 3, CL 1 > CL 8 = CL 9 = CL 7
PSE	CL 5 = CL 6 = CL 4 > CL 7, CL 5 = CL 6 = CL 4 > CL 2, CL 1 > CL 7 CL 1 > CL 9 CL 5 > CL 3 = CL 2, CL 5 = CL 6 = CL 4 > CL 8 = CL 9
NSE	CL 9 > CL 4 = CL 6 = CL 5, CL 2 = CL 7 = CL 3 = CL 8 > CL 5
精神的不健康度	CL 2 > CL 4 = CL 1
遅刻数	CL 7 > CL 6
欠席数	CL 7 = CL 2 = CL 4 = CL 5 = CL 8 = CL 9 = CL 1 = CL 6 = CL 3

注) 欠席数の単変量分析結果は有意ではなかった

その後、多重比較 (Tukey法) を実施して Table 4 に結果を示した。各尺度の平均および多重比較の結果を Table 3 に示した。各CLの特徴を以下に示した。CL1は把握可能感が低く処理可能感と有意味感が高いため、Antonovsky⁸⁾ の仮定するBタイプであると考えられる。CL 1のその他の変数は平均的であった。CL 2は把握可能感が高く、処理可能感が平均的で、有意味感が低いため、Antonovsky⁸⁾ の仮定するFタイプであると考えられる。CL 2の人生の意味や自尊感情、精神的不健康度はいずれもやや悪かった。CL 3は把握可能感が平均的で、処理可能感が低く、有意味感のみが高いため、Antonovsky⁸⁾ の仮定するGタイプであると考えられる。CL 3のその他の変数は平均的であった。CL 4はSOCが平均的な群であり、Antonovsky⁸⁾ の仮定するタイプのいずれにも該当しなかった。CL 4の人生の意味とPSEがやや高く、その他の変数が平均的であった。CL 5はSOCの全てが非常に高いため、Antonovsky⁸⁾ の仮定するAタイプであると考えられる。それ故に、人生の意味や

PSEが高く、NSEが低かった。CL 6は、把握可能感と処理可能感が平均的で、有意味感が高いため、Antonovsky⁸⁾ の仮定するDタイプであると考えられる。CL 6の人生の意味やPSEがやや高く、NSEが低かった。CL 7はSOCの全てが非常に低いため、Antonovsky⁸⁾ の仮定するHタイプであると考えられる。CL 7の人生の意味やPSEが低く、NSEや精神的な健康度、遅刻数もやや高かった。CL 8はSOCの全てがやや低いため、Antonovsky⁸⁾ の仮定するHタイプであると考えられる。CL8の人生の意味やPSEが低く、それ以外は平均的であった。CL 9は把握可能感と処理可能感が低く、有意味感が平均的であるためAntonovsky⁸⁾ の仮定するDタイプに近いものの、いずれにも該当せず、人生の意味やPSEが低く、NSEや遅刻数がやや高い群であった。

考察

本研究の目的は、TP-SOC 9を用いることによりAntonovsky⁸⁾ の仮定するTP-SOCのサブタイプを抽出することと、TP-SOCのサブタイプ別の心理的特徴の検討を行うことであった。

各尺度の基礎統計量と信頼性係数、各尺度間の相関係数

まず、各尺度の基礎統計量と信頼性係数を算出し、本研究のデータの特徴を検討した。その結果、TP-SOC¹²⁾ や人生の意味²¹⁾、自尊感情²⁴⁾といった値に不備は確認されなかった。他方、精神的な健康度²⁸⁾は左寄りの値を示した。これは、本研究の対象が一般大学生であることから、健康的な人々がほとんどであったと考えられる。また、遅刻数が床効果を、欠席数が左寄りの結果をそれぞれ示したことから、ほとんどの学生は遅刻や欠席をそもそもしないか、してもごくわずかであることがわかった。これは女子大学生のデータ²⁹⁾でも同様の結果が示されている。これらのことから、一般大学生のデータを用いた分析では、遅刻や欠席の多い学生に特徴的な点が見られたとしても、それ以外のデータの影響を受けて、結果として確認できない可能性があることがわかった。

相関分析からは、TP-SOCのサブタイプの存在を検討する意義が示された。まず、TP-SOCや処理可能感、有意味感、人生の意味やPSEと正の、NSEと精神的な健康度、遅刻数と負の相関を示したことから、TP-SOCは概ね健康の指標としてのアセスメントツールとして活用することに対して有望である可能性が示された。しかし、把握可能感、精神的な健康度と無相関であった。これは、把握可能感がストレスに対する把握できている感覚であり、ストレスに対処してその影響を失くすことではないからであると考えられる。また、遅刻数・欠席数は人生の意味や自尊感情と無相関であったが、精神的な健康度と弱い正の相関を示した。これは、健康的な人々が多いことにより、そうでない少数の人々の結果が相殺されてしまったことにより、無相関あるいは弱い正の相関しか確認できなかった可能性がある。したがって、TP-SOCのサブタイプを検討することにより、遅刻

や欠席の多い健康度が低いような人々の心理的特徴を検討する必要性が示された。

TP-SOCのサブタイプの抽出と各クラスターの心理的特徴

TP-SOCを投入したクラスター分析からは、幾つか特徴的なサブタイプが抽出された。しかし、Antonovsky⁸⁾の仮定するサブタイプが全て抽出されたわけではなかった。以下に、それぞれのサブタイプを考察する。

CL 1やCL 2, CL 3, CL 4は、TP-SOCに多少の差があるものの、各指標は概ね平均的と考えられる群であった。CL 1は把握可能感が、CL 2は有意味感が、CL 3は処理可能感が低い群であった。その他の変数についても概ね平均的であったが、CL 2の精神的健康度が極めて悪かった。これは、CL 2がストレッサーを把握しながらもその処理ができず、処理に意味を見いだせない群であったことから健康度が悪くなったのかもしれない。CL 4はTP-SOCが平均的な群であった。その他の変数などについても平均的で、所属者数も他のCLよりも多かった。このことから一般大学生において最も多いと考えられる。これらの群については、これまでのサブタイプの検討から抽出されてこなかったため、さらなる検討が必要であろう。

また、CL 5やCL 6はストレス対処力の強い健康的な群と考えられる。CL 5はTP-SOCが高く、健康的であり、遅刻はほとんどしない群であった。Salamonson et al.³⁰⁾はSOCが高い看護学部の学生の学習意欲や学業成績も高いことを見出しているが、本研究でも同様の傾向が見られた群であろう。CL 6はTP-SOCの把握可能感と処理可能感が平均的で、有意味感が高い群であった。今井田・磯和⁹⁾はSOC-13により同様のSOCのサブタイプを見出しており、把握可能感や処理可能感も高じる可能性があること⁸⁾を報告している。こうした群は、休退学の可能性の少ない健康的な学生であろう。

他方、CL 7やCL 8, CL 9はストレス対処力の弱い健康度の低い群と考えられる。CL 7は全般的にTP-SOCの低い群であった。人生の意味も感じておらず、自尊感情や精神的健康度も否定的で遅刻数も多かった。したがって、CL 7のような学生相談などに早期に接続すると言った迅速な支援が必要であると考えられる。CL 8は全般的にTP-SOCのやや低い群であった。精神的健康度や遅刻数といった点で顕在的な悪化は見られなかったが、人生の意味も低いことから、修学意欲の低下していることが予測される。CL 9はTP-SOCのうち把握可能感や処理可能感が低く、有意味感が平均的な群であった。これは、今井田・磯和⁹⁾でも同様の健康度が低い群として抽出された。本研究でも自尊感情や心理的健康度が否定的で遅刻数も多いといった健康度の低い群として抽出されていた。これらの群は、有意味感が低い群であることから、今後把握可能感や処理可能感が下がることが想定される群であることから、精神的健康度や遅刻数が平均的なCL 8であっても、今後の休退学防止に考慮すべきであろう。

限界と課題

本研究では、遅刻や欠席の聴取において瑕疵があった。遅刻数については具体的な平均回数を回答させなかったのに対して、欠席は具体的な回数の回答を求めた。そのため、遅刻については回答者の考え方や価値観が反映された。また、遅刻や欠席数は実際の回数でなく回答者の自己申告に依存していたため、遅刻や欠席回数を自ら把握していないような回答者の場合、過少または過大に申告している可能性もあろう。そのため、本研究における遅刻や欠席数については信頼できる指標とは言い難い。今後、実際の遅刻数や欠席数、GPAといった指標を用いた検討を行うことにより、支援の必要な学生の抽出の検討を行うべきであろう。

また、本研究で用いたTP-SOC 9¹²⁾ は、SOC-29 やSOC-13 との併存的妥当性を未検討である。ただし、SOC-13 を用いて抽出されたSOCのサブタイプ⁹⁾ と同様の傾向を有する群が本研究でも抽出されたことから、SOCとTP-SOCは一定の共通性のある概念なのかもしれない。今後、SOCの関連尺度とTP-SOC 9を併せて測定したデータを用いて、TP-SOCの併存的妥当性を検討する必要がある。

文献

- 1) 西丸 良一. 大学生の学業成績・能力向上感と入試選抜方法の関連. 評論・社会学, 111, 2014, 141-155.
- 2) 熊谷 秋三・大曲 めぐみ・高柳 茂美・林 直亨・松下 智子・福盛 英明・眞崎 義憲・一宮 厚. 大学生の学修不良者および希死念慮保有者のメンタルヘルスとその関連——EQUISITE Study——. 健康科学, 38, 2016, 1-10.
- 3) 宇田川 拓雄. 高等教育における準備不足学生の教育に関する研究. 嘉悦大学研究論集, 62 (2) , 2020, 51-68.
- 4) 國方 功大・井上 文夫. 大学生の授業中における居眠りの要因. 学校保健研究, 54 (1) , 2012, 62-71.
- 5) Antonovsky, A. *Health, stress and coping*. San Francisco. Jossey-Bass. 1979.
- 6) Foureur, M., Besley, K., Burton, G., Yu, N., & Crisp, J. Enhancing the resilience of nurses and midwives: Pilot of a mindfulnessbased program for increased health, sense of coherence and decreased depression, anxiety and stress. *Contemporary nurse*, 45 (1) , 2013, 114-125.
- 7) Harrop, E., Noble, S., Edwards, M., Sivell, S., Moore, B., & Nelson, A. Managing, making sense of and finding meaning in advanced illness: a qualitative exploration of the coping and wellbeing experiences of patients with lung cancer. *Sociology of health & illness*, 39 (8) , 2017, 1448-1464.
- 8) Antonovsky, A. *Unraveling the Mystery of Health*. San Francisco. Jossey-Bass, 1987.

- 9) 今井田 貴裕・磯和 壮太郎. 首尾一貫感覚のサブタイプの探求——有意味感の独自性と楽観性, 自尊感情, 抑うつに着目して——. 応用心理学研究, 49 (2) , 2023, 152-153.
- 10) 磯和 壮太郎・今井田 貴裕・福井 義一. 首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) を測定する日本語版尺度の因子構造の再検討——学生データと社会人データの比較——. 名古屋芸術大学 人間発達研究所年報, 12 (2) , 2024, 1-14.
- 11) 今井田 貴裕・福井 義一. 健康生成モデルにおける汎抵抗資源 (GRRs) の分類の妥当性の検討および首尾一貫感覚 (SOC) の形成に寄与する GRRs の特定. 心の危機と臨床の知, 23, 2022, 1-21
- 12) 今井田 貴裕・磯和 壮太郎. 簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度と Time Perspective-Sense Of Coherence 9 の作成. キャリアセンター紀要, 12, 2023, 13-24.
- 13) Togari, T., Yamazaki, Y., Nakayama, K., & Shimizu, J. Development of a short version of the sense of coherence scale for population survey. *Journal of Epidemiology & Community Health*, 61 (10) , 2007, 921-922.
- 14) Eriksson, M., & Lindström, B. Antonovsky's sense of coherence scale and the relation with health: a systematic review. *Journal of epidemiology & community health*, 60 (5) , 2006, 376-381.
- 15) Lämsimies, H., Pietilä, A. M., Hietasola-Husu, S., & Kangasniemi, M. A systematic review of adolescents' sense of coherence and health. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 31 (4) , 2017, 651-661.
- 16) Halama, P. Meaning in life and coping: sense of meaning as a buffer against stress. *Meaning in positive and existential psychology*, 2014, 239-250.
- 17) Johnson, M. Approaching the salutogenesis of sense of coherence: The role of 'active' self-esteem and coping. *British Journal of Health Psychology*, 9 (3) , 2004, 419-432.
- 18) Nilsson, K. W., Leppert, J., Simonsson, B., & Starrin, B. Sense of coherence and psychological well-being: improvement with age. *Journal of Epidemiology & Community Health*, 64 (4) , 2010, 347-352.
- 19) 磯和 壮太郎・今井田 貴裕. 大学生の職業選択不安と多次元アイデンティティの関係の検討——首尾一貫感覚の調整効果を視野に入れて——名古屋芸術大学キャリアセンター紀要, 13, 2024, 15-33.
- 20) Martela, F., & Steger, M. F. The role of significance relative to the other dimensions of meaning in life—an examination utilizing the three dimensional meaning in life scale (3DM) . *The journal of positive psychology*, 18 (4) , 2023, 606-626.
- 21) 浦田 悠・島井 哲志・マルテラ F.・スティーガー M. F. 人生の意味三次元尺度 (3DM) 日本版の開発 (1) ——信頼性・妥当性の検討——. 日本パーソナリティ心理学会第 32

回大会発表論文集, 2023, 131.

- 22) Schnell, T., & Hoffmann, C. ME-Work: Development and validation of a modular meaning in work inventory. *Frontiers in Psychology*, 11, 2020, 599913.
- 23) Rosenberg, M. *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1965.
- 24) 桜井 茂男. ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 2000, 65-71.
- 25) 福留 広大・森永 康子. 自己評価的尺度における肯定的・否定的項目群因子の年齢別の分析——ローゼンバーグ自尊感情尺度と特性的自己効力感尺度——. 教育心理学研究, 66 (30) , 2018, 212-224
- 26) 福留 広大・藤田 尚文・戸谷 彰宏・小林 渚・古川 善也・森永 康子. 中学生におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の 2 側面——「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」——. 教育心理学研究, 65 (2) , 2017, 183-196.
- 27) Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S. L., Waletzky, E. E., & Zaslavsky, A. M. Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychological medicine*, 32 (6) , 2002, 959-976.
- 28) 古川 壽亮・大野 裕・宇田 英典・中根 允文. 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究. 平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業) 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究協力報告書, 2003.
- 29) 川上 正浩. 遅れに対する態度と実際の遅れ生起との関連. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 2007, 75-83.
- 30) Salamonson, Y., Ramjan, L. M., Van den Nieuwenhuizen, S., Metcalfe, L., Chang, S., & Everett, B. Sense of coherence, self-regulated learning and academic performance in first year nursing students: A cluster analysis approach. *Nurse Education in Practice*, 17, 2016, 208-213.